

完全皮下植込み型除細動器 (S-ICD) における誤作動発生 リスク減少を目指した術前スクリーニングの強化の検討

中野 誠 福田浩二 長谷部雄飛 平野道基
木村義隆 千葉貴彦 深澤恭之朗 三木景太
諸澤 薦 下川宏明

当院では、2016年3月から10月までに14例の完全皮下植込み型除細動器(S-ICD)植込み術を施行している。そのなかで、いわゆる広義の特発性心室細動に対するS-ICD植込みは4例であり、3例がBrugada症候群(BS)症例、1例が狭義の特発性心室細動症例である(4例全員男性、平均年齢42.3歳)。BS症例は心室細動蘇生例が2例、失神例が1例である。S-ICD植込みに際しては、T波のoversensingによる誤作動を回避するため、術前の心電図スクリーニングが必須とされているが、特に洞性頻脈時などの際にT波が増高する事象が知られているため、当院では原則、全症例において運動負荷時の心電図スクリーニングを施行している。さらに、Brugada症候群症例ではcoved型心電図増悪時の誤作動のリスクを考慮し、ピルシカイニド負荷試験時にも心電図スクリーニングを施行している。現在まで、1例のBS症例で特発性左室起源心室頻拍による誤作動を認めているが、洞性頻脈による誤作動は認めていない。S-ICDにおいて誤作動の回避は重要な課題であるが、術前のスクリーニングを強化することで、誤作動発生リスクを減少させられる可能性があると考えられた。

Keywords

- Brugada 症候群
- 完全皮下植込み型除細動器 (S-ICD)
- スクリーニング

東北大学大学院医学系研究科循環器内科学分野
(〒980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町1-1)

Usefulness of Intensive Electrocardiogram Screening for S-ICD to Avoid Inappropriate Shocks

Makoto Nakano, Koji Fukuda, Yuhi Hasebe, Michinori Hirano, Yoshitaka Kimura, Takahiko Chiba, Kyoshiro Fukasawa, Keita Miki, Susumu Morosawa, Hiroaki Shimokawa